

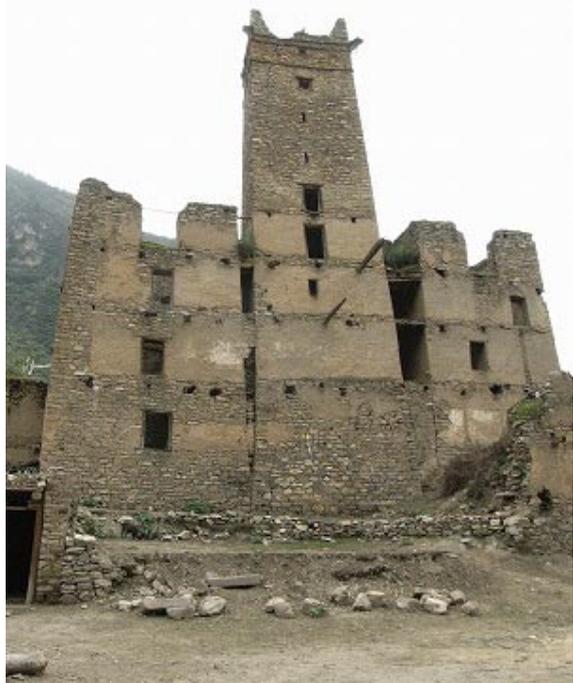
## 四姑娘山・花の旅

小川真理子

あっという間に駆け抜けた、中国・チベット12日間の旅だった。

行く前は、青いケシをはじめ花が咲き乱れている、標高が4300mの地点に行くということくらいしか、知らなかった。さずがに出発を数日後に控え、「一体私はどこに行くのだろうか?」と気になったが、ワンリィのホームページで紹介が出て大いに期待が膨らむものの、四川省の成都からどの程度はなれたところに行くのか、全くわからない。第一、目的地は四川省なのだから中国(漢民族)だとばかり思っていたのだが、行ってみてびっくり、我々が過ごしたのはほとんどチベット民族の地域だったのだ。チベット民族はチベット自治区に住んでいるものとばかり思っていた自分の認識不足を痛感した。

さて、まったくの無知で始まった旅ながら、すばらしい案内人・大川氏のおかげで多少なりともチベットの歴史、文化に触れることができたのは幸いだった。山の上にそびえる領主の館。この領主は中国革命のとき、八路軍に取り入って命脈を保ったらしい。また、由緒あるチベット仏教のお寺。ここにはすばらしい壁画が保存されているが、文化大革命の際にはお坊さんたちが壁画の前に経典を積み上げて何とか隠し通し、破壊から救ったとか。いずれも悠久の時間の中でゆっくりと朽ちていってはいるが、かつては喜び、恐れ、祈りなど、人間の営みが渦巻いていた場所なのだろう。そして伝統的な石造りながらも今も使われている農村の家々。屋上から女の子が「おかあさーん」と呼びかけている。その声は明るい畑の上をどこまでも通っていき、遠くの方から返事が戻ってくる。きっとこんな光景も、ずっと昔から繰り返されてきたのだろう、なんともどかな農村の一コマだった。



石積みチベット建築



もちろん、今回の旅のビッグイベントはなんとと言っても四姑娘山自然保護区でのキャンプである。馬の背に何時間も揺られてキャンプ場にたどり着き、そしてそこからまた咲き乱れる花々を見ながら登っていき、しょぼ降る雨の中でそっと咲いている青いケシを見つけた喜びは、たとえようもない。まさに、天上に咲く花、という感じであった。今年は天候不順で例年よりも花が少ないそうだが、我々の目には、どの斜面もエーデルワイスやキンポウゲで一面の花のじゅうたんのように思えた。ただし、ダイオウとかバイモなど薬草になる植物は業者に根こそぎ採られてしまっているらしく、以前はいっぱいあったという谷に行っても全く見つけることができなかった。それらの植物の買い付けに日本も関わっているらしいと聞くと複雑な気持ちである。

キャンプサイトはヤクの放牧小屋の隣に作られた。石を積み上げて作った小さな小屋の中はいろいろで暖かく、皆ほっとしたように火にあたっている。小屋の主人がいろいろにかけた大なべで手際よく料理を作り、おいしそう匂いが漂ってくる頃には小屋は満員。家の人も、関係ない人も料理の分け前にあずかっているらしい。電気洗濯機を回して作ったバターやヨーグルトも供された。そして誰もが大声で、楽しそうにおしゃべりをしている。なにもない、けれどあたたかい、そんなチベットのくらしを垣間見た今回の旅だった。

